

アタゴオルは猫の森 7

ATAGOUL is Cat's Forest

ますむら・ひろし

MFコミックス

フラッパーシリーズ

MEDIA FACTORY

銀しぶき海のホオズキ島に滞在してる、ヒデヨシ達。
海の主である巨大タコ・マサオシを
生喰いしたことがきっかけで、
ヒデヨシは伝説の海賊・異断銀の二代目、
驚異の海賊船・ギンダウル号の船長となる！
伝説の海賊が隠した秘宝とは？
そして船と財宝を狙って海賊・モズマ男爵の
ブルウ・パッセン（青ダコ人魚）号が砲撃してきた!!

海洋冒険シリーズ
『波動王海談記』の
第①話～⑧話を、
作者書き下ろしの近況報告
『アタゴオル余波7』と
ともにお届けします。

9784840109598
1929979005146
ISBN4-8401-0959-1
C9979 ¥514E
定価：本体514円（税別）
雑誌52642-59
メディアファクトリー
MEDIA FACTORY



ますむら・ひろし

昭和27年生まれ
山形県出身。
昭和48年デビュー作「霧にむせぶ夜」が
「週刊少年ジャンプ」に掲載。
その後青林堂に入り
雑誌「ガロ」を舞台に活躍、独立後現在に至る。
平成9年には「アタゴオル玉手箱」で
日本漫画家協会賞大賞受賞。
宮沢賢治作品の漫画化にも意欲的に取り組み、
独自の感性で大胆に視覚化している。
中でも「銀河鉄道の夜」は
昭和60年、劇場アニメとして公開、
マンガファンだけでなく
宮沢賢治愛好家の間でも高い評価を得ている。

装画・ますむら・ひろし
装幀・多田和博＋岡田ひとみ
フォーマットデザイン・フィールドワーク

ATAGOUL is Cat's Forest

アタゴオルは猫の森 ⑦

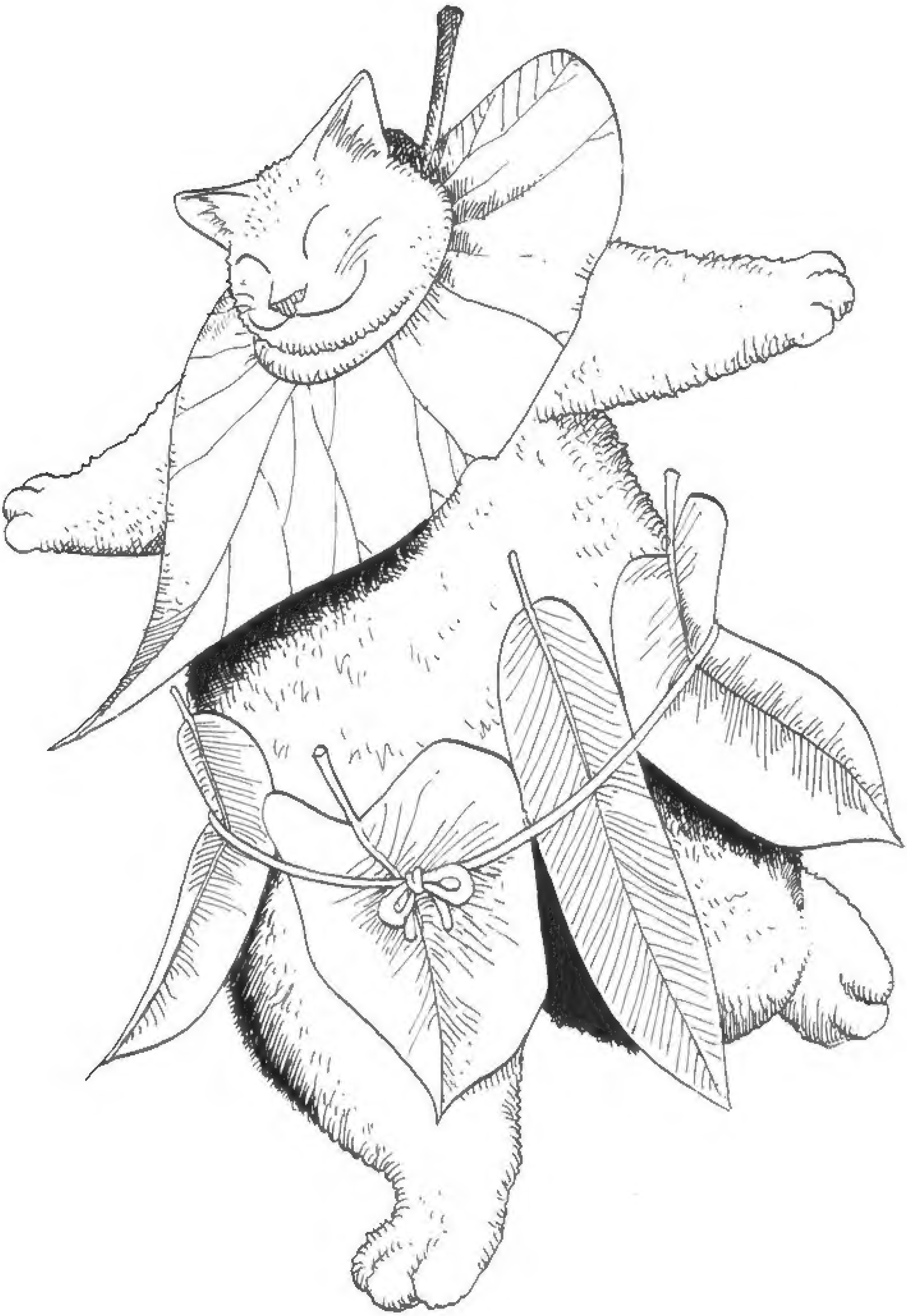
ますむら・ひろし



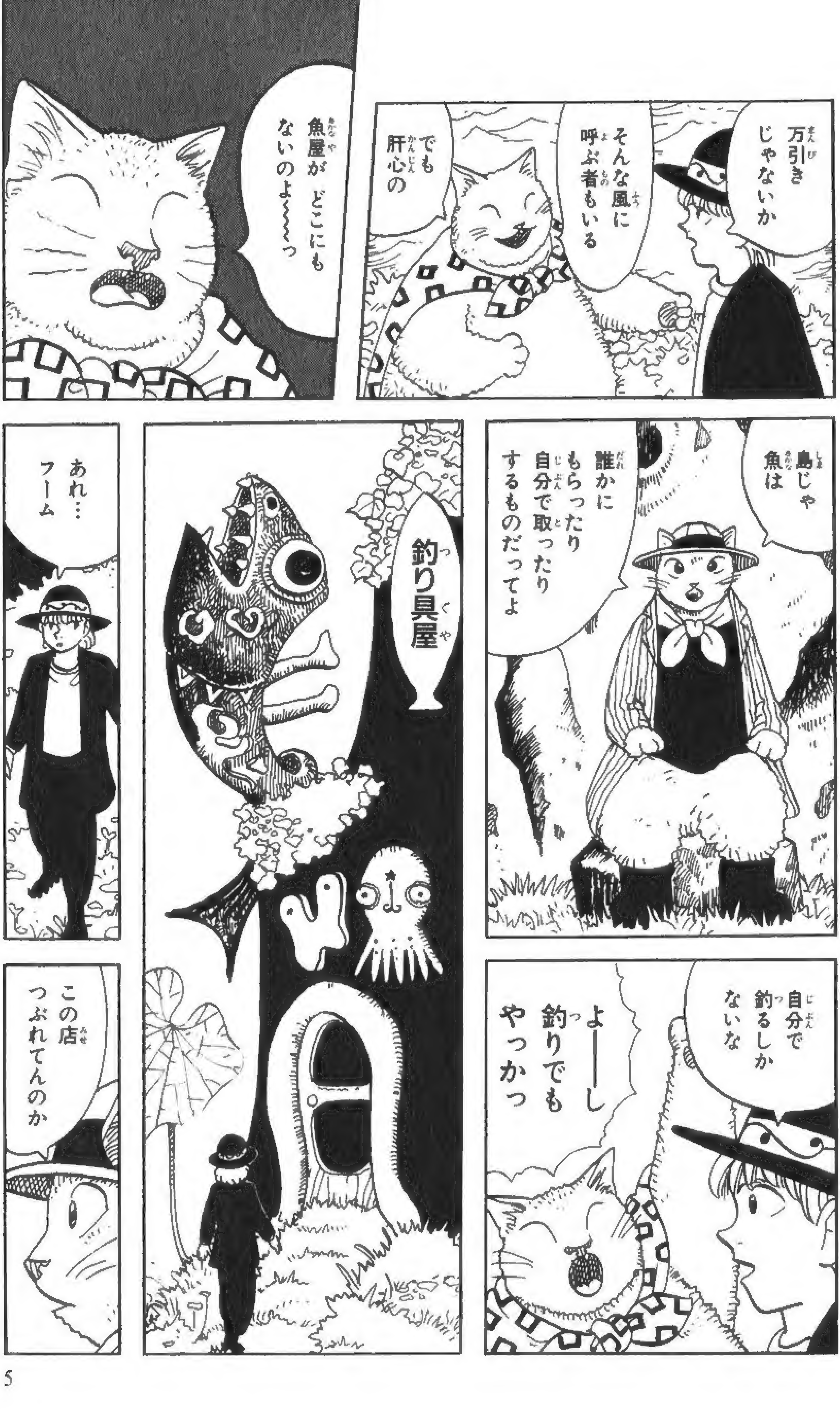
アタゴオルは猫の森 ⑦

ATAGOUL is Cat's Forest

第一話　波動王海談記①
〔マヒ〕




フーム…おかしい
なにが？
オレの手がふるえてるだろう
ぷる
ぷる
ああ
これは禁断症状なのよ
なんの禁断症状なんだ？
でかい魚をグッと抱いて
ターッと走って逃げると親父が追ってくるやつの


万引きじゃないか
そんな風に呼ぶ者もいる
でも肝心の
魚屋が どこにもないのよ〜〜っ
島じゃ魚は
誰かにもらったり自分で取ったりするものだってよ
釣り具屋
あれ…フーム
自分で釣るしかないな
よーーし釣りでもやっかっ
この店つぶれてんのか


釣り竿も釣り針もないぞ
あーーっぶっつぶれてるな
店の親父は大酒飲みでなまけ者に違いない
誰がなまけ者だと?
釣り道具がぜんぜんないじゃないのォ
道具なら
ホラここに
それって箱だろ


これで 釣るんです
しっかし
こんな
魚釣る道具 完成させるのに なんで山に 登るのさ
虹巻谷と いう所へ 行けば 判るだろう
こんな 箱で 魚なんか 取れるのか
水晶で できてるな
おっ
虹巻谷だぞ
んっ


イエーッ 瓦斯なのよォ
凄い 硫黄の匂いだ
ツンツン いい匂いーっ
味覚もヒドイが 嗅覚も 狂ってるな
ああ ツンツン
それ以上 近づくと 死ぬぞ 火山瓦斯だ


火山瓦斯!!
ほほほ
吸います
吸います
うげ〜〜〜っ
グワッ
ああ…
苦しい
死ぬかと
思ったわ
凄い奴だなあ
おまえ……
一息吸っただけで
普通 死ぬぞ
クサヤ葉巻で
きたえてるからね
虹巻谷の
虹というのは
この噴気の
煙の色から
来ているのかなぁ
ああ
そんな風に
言われて
おるぞ

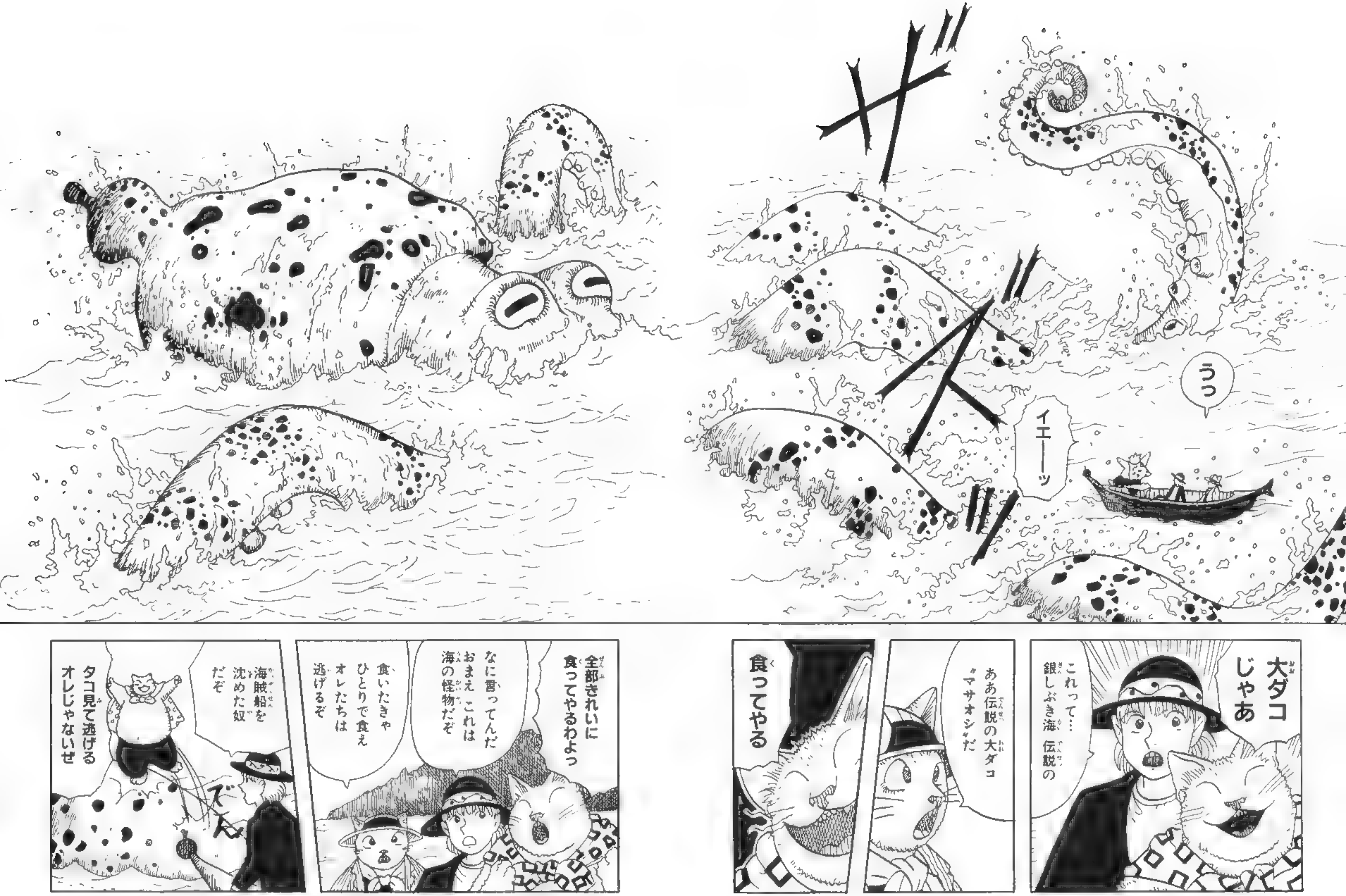

あんな青々した煙や
紅色の煙……
地中に眠る不思議な
成分が噴いているのだ
ところで
アンタら
釣り箱作りに
来たんだろ
そーなのよ
コレ
どうすんのさ
その箱のフタを
開いて…
次の言葉を
てきとうに旋律に
乗せて唄うのです
おまえは──っ
オレの──っ
獲物──っ
おまえは
オレの
獲物
100回も
やったぞ
ハイ
けっこうです
よーし
海に行くのよーっ


いさんで来たものの…ホントに釣れるのかよーっ
ザーッ
ブツブツ言ってないで
ではオレがやろう
おまえは
オレの
あっ
フッ
地味な唄だねえ



獲物
おまえは
ほほほ
こんな ショボイ唄じゃ 魚も笑うぜ
プカ
にやっ
すごいぞ テンプラ
魚が シビレてる
なんと
テンプラの ヘナチョコ唄で こんなに取れるのなら
オレの 美声は すんごい ぞう


おがえはあ
おげも
えぼお
やかましくて音が割れてる
おがえはあ
はて…？
なんかやかましいだけでぜんぜん浮いてこないぞ
くっそーっ
なんでテンプラだけ取れるのさーっ
ガッ
ガッ
ガッ
魚ーーっコノヤロッ


うっ
イエーーッ
大ダコじゃあ
これって… 銀しぶき海 伝説の
ああ伝説の大ダコ〝マサオシ〟だ
食ってやる
全部きれいに食ってやるわよっ
なに言ってんだ おまえ これは海の怪物だぞ
食いたきゃひとりで食え オレたちは逃げるぞ
海賊船を沈めた奴だぞ
タコ見て逃げるオレじゃないぜ


ほほほ
生食いはタマランのう
はぐはぐ
ヒデヨシーッ
タコが起きたぞっ
ほらほら音楽だよォ
しびれなさい
おまえは
オレの獲物ーーっ


ザヴ
ほほほっ
大ダコなんか思いのままよっ
なんだありゃ
八足神のマサオシ様を食ってるぞ
なんて恐ろしいことを
無茶やるなあ
あんな大ダコを食べるなんて…
あのタコ寝てますよ…でもどうやって…？


釣り箱を使ったんだが
まさかマサオシ様を眠らせるなんて……
あいつ
大ダコより恐ろしい奴かも知れんな
は――っ 食った食った
うう 体が重い
あっ コノヤロ
よくもマサオシ様をかじったなっ
アンタたちなんなのさ？
八足神マサオシ派である


我らの神マサオシ様をかじるとはとんでもない野郎だ
ぶちのめしてくれるっ
ほほほ
やかましい奴らだ
これでもくらえっ
おまえは
オレの
獲物
馬鹿野郎
オレたちは魚やタコじゃねーんだぜ
らっ
それはな
獲物にしか効かないんだよ
んっ


あーっ
フラッ
ダッ
信じられん
釣り箱が猫に影響を与えるなんてっ
うう
おまえは
オレの


獲物
うう
いやあ
気色の悪い
変な気分です
おまえは
オレの
みんなだいじょうぶか
気分が虹色でグチャグチャです
これじゃ大ダコだってのびるわな
ああ


パン
いっ
イエーーッ
大ダコよりも凶暴なテマリをこんなに簡単にっ
素晴らしい釣り箱最高よっ


ヒデヨシ　その箱　よこせっ
やなこった
なぜだ?
どうして…オレたちが釣り箱にやられるんだ?
みんな
獲物だからでしょう
それは
アイツにとっては
なんだか恐ろしい男ですねえ
よく　あんな奴と一緒にいるな
すいません
3日後



おまえは
オレの
あそこだな
ほっほっ
他猫の食いかけって
勝利の味だわん
コラッ
みっともないことすんなっ
おまえたちも食っていいぞ
誰が食うかよ



ヒデヨシ 釣り箱渡せ
やーだよ
うっ
なんだか気持ち悪くなってきた…
テンプラ おまえ 平気なのか
あっ パンツ しっかりしろ
情けない奴だ
どうしてオレは平気なんだろう?
あんまりそばにいすぎて……マヒしてるのかな
違うよ テンプラ
それは オレたちが


親友だからさ

第二話　波動王海談記②
〔頼りになる男〕




しっかし
スゴイ男だよ
ホラ
あそこだ
あ〜〜っ
フンガラ
ゴロロン
酔ーい
よい
昼間っから
酒飲んでる
怪物ダコの
マサオシを
かじった男だぞ
なんでもするさ
ヒデヨシさん
ですね
そーよ
なーに？
尊敬してます
貴方は
最高です


よーし 小僧 気に入った 酒飲めっ
お酒は けっこうです
そのかわり コレにお名前 書いて下さい
ようござんす
サラ サラ
なんです この線？
ヒデヨシ文字さ オレだけの 文字なのよォ
自分だけの 文字を 持ってるん ですかっ 凄いなあ
字知らないんじゃ ないのか
ところで大ダコの マサオシをかじったりして 恐ろしくないんですか？


あんなタコ
でかいだけだぜ
恐ろしいわけ
ねーべよ
あいつは
怪物だから
貴方に
復讐するって
みんなが
言ってますよ
タコの復讐なんて
どーせ墨ぶっかける
くらいでしょ
それに
オレには
無敵の
釣り箱が
あるんだぜ
いただきっ
あっコラ
やったぞっ
これで
マサオシ様は
御安泰


さあっ これで マサオシ様が おまえを ぶちのめすぞ
そーだそーだ 無礼者に お裁きが下るのだ
何がお裁きだっ 今度は 頭っから みーんな食って やるぜ
食うだと
海の大王に 向かって 不届き千万
フンガラ フンガラ マサオシ マサオシ
カチ カチ
あっ八足神マサオシ派の奴ら マサオシを呼ぶつもりだ
ヒデヨシさん 早く逃げて 下さい
オレは万引きと 食い逃げ以外は 逃げない男さっ
出て来い マサオシ ぶちのめして やるぜっ
かっこ い——っ


ザバ
らっ
わっ
キャーッ
あっ逃げたっ
なんだアイツ言ってる事とやってる事違うぞ
ドスドス
いや〜〜っ


ドスドスドス
ん
ようヒデヨシ
食い逃げか?
ドスドス
マサオシよっ
あいつが
無実のオレを
あっ


あ
びっ
うっ
なんで
オレたちが
墨かぶって
タコの墨なんか
かぶるかよっ
しっかし
しつこいタコだ
おまえは
助かるんだっ
ドス
ほほほ
ドス
だがよォ
しょっちゅう
魚屋に
追われて
るんだぜ
ドス
ドス
タコなんかに
捕まるもんかい


も〜〜っ
ヒデヨシの奴〜〜っ
青黒い墨か…
鯨油みたいな匂いがするな
うう顔がパリパリする…
油紙みたいだな
はがれるぞ
ヒデヨシの奴逃げられたかな
2日後
しかし…
…しつこいタコめ
まーだあんな所にいる


くーっ
腹減った…
らっ
ついてる ついてる
こんな所に
食い物屋が
ちわーっ
あら
く〜〜っ
うんめ〜〜っ
ガツ
ガツ
おっ
ヒデヨシ



んまいぞっ ここの荒海丼
パンツがそんなにがっつくとは凄そうだな
いらっしゃい なんにしやす
荒海丼を5つ
へっ
5つですね
お〜〜っ んめ〜〜っ んめすぎるう
ガツ ガツ
親父──っ 熱燗お代わりな─っ
にゃっ
テンプラ おまえ昼間っから酒飲んでんのか



なに びっくりしてるのさ
おまえが年中やってることだろ——っ
そーだ そーだぞっ
はいよっ 熱燗
う——っ もう いらないや ヒデヨシにやってくれっ
それから
お勘定は
ヒデヨシからもらってねっ
ブッ
こらっ おまえらっ
おい
ちゃんと払えよな
ぐっ
うぐっ


くっすおう あいつらっ
払いますっ 払やあいいんでしょ
もぞっ
ホレ
眠り花粉
くっそーっ あいつら オレに罪を かぶせや がってーっ
恥を知れっ 恥を
食い逃げする なんてっ とんでもない 奴らだっ
翌日


友情の味ーっ
「にっこり団子」
発見っ
こらー
食い逃げ野郎
なに言ってんだ
おまえっ
お客
さーん


酒代払って下さいよォ
え？
パンツさん昨日の晩うちの店で
そこのテンプラ君とタップリ飲んだじゃないですか
ホオズキ島の古代史を聞かせていただき勉強になりましたが
飲み逃げはイケマセンや
きっちり払ってもらおうかい
なにかのマチガイじゃ？
猫違いですよ
なに？
さんざん飲んで記憶喪失のマネかよォ
島の取り立ては厳しいぞオ
そーそーっ厳しくやりなさい
厳しっ



あっ
ん？
ふーっ もう食えねえや
すぐ空くさ
！
あっ…
テンプラとパンツが2個あるぞ
なんだ コレは!?


ほう なんだ おまえこそ
よくもオレに化けたな贋テン!!
テンプラはオレだぞ
オレが本物さ
そこのオデブさんのヒデヨシ どっちがニセモノだい？
オデブさんだとォ
このニセ野郎
なに言ってんだ!
ホレ 鯨の肉でも食いなよ
おおっ うえへへ
貴方がテンプラだ
そして おまえが贋テンだっ
なに言ってんだよ もう
鯨の肉で買収されて
くそーっ どっちなんだっ



見れば判るだろう オレがパンツ
こいつは贋パンツ
なんなんだ コイツ …クネクネかなあ？
あっ
テンプラ君とパンツ君が
ふふっ 分裂してますぞ
素晴らしーっ
素晴らしくないのよオ
どっちがホンモノだか判んないのよォ
フーム
確かに見分けがつきませんねえ


こんな小僧のヒデ丸や薄バカのヒデヨシに判るわけねーだろう
アンタがニセモノよ
なにが化けてんのさ!?
へっ
嘘ハッタリの大ハズレ占師にニセモノ呼ばわりされてもねえ
なに〜〜〜っ
偉いよく言った
おまえこそテンプラだあ
ぎゅっ
うっ
あっ


らっ
こいつ墨だぞ
墨!?
うぐっ
ホントだ
墨でできてる
あれっ鯨油みたいな匂いが…
ああっ この匂い


そうかっ
大ダコのマサオシが噴いた墨の匂いだ
やっと気づいたな
こいつらタコの墨かよォ
でも… どうして!?
もしかしてホラ
オレたちマサオシの墨をかぶったろう
あの時の墨が!?
いかにも
そういうことさ
このニセモノどもがっ
オレたちこそホンモノさ


あ
ホラね
らっ
ザザーッ
なんだ
コレは!?
ザザーッ
おまえたちは
海へ還るのさ
そしてオレたちが
おまえたちになるのさ
なるほど
うまいもんだ
じゃ
そういうことで
ザーッ



さよなら ニセモノ諸君
さーさー紅マグロ1本であいつらをぶっ飛ばしてやるわよーっ
アンタこういう時に足元見るのォ
3本でも4本でも買ってやるから捕まえろっ
ちょっと待ちなさいよっ
ダメだ 足が動かない
よーーしっ
待てコノヤロ
あっ
やっと捕まえたな


食い逃げだーーっ
ドドス

第三話　波動王海談記③
〔異断銀〕




うーーむ
「これらの者食い逃げするので注意せよ」
まいったなあ
犯罪者だよ
早いとこなんとかしないと…体がどんどん変になる
こうなるとヒデヨシ君だけが頼りですね



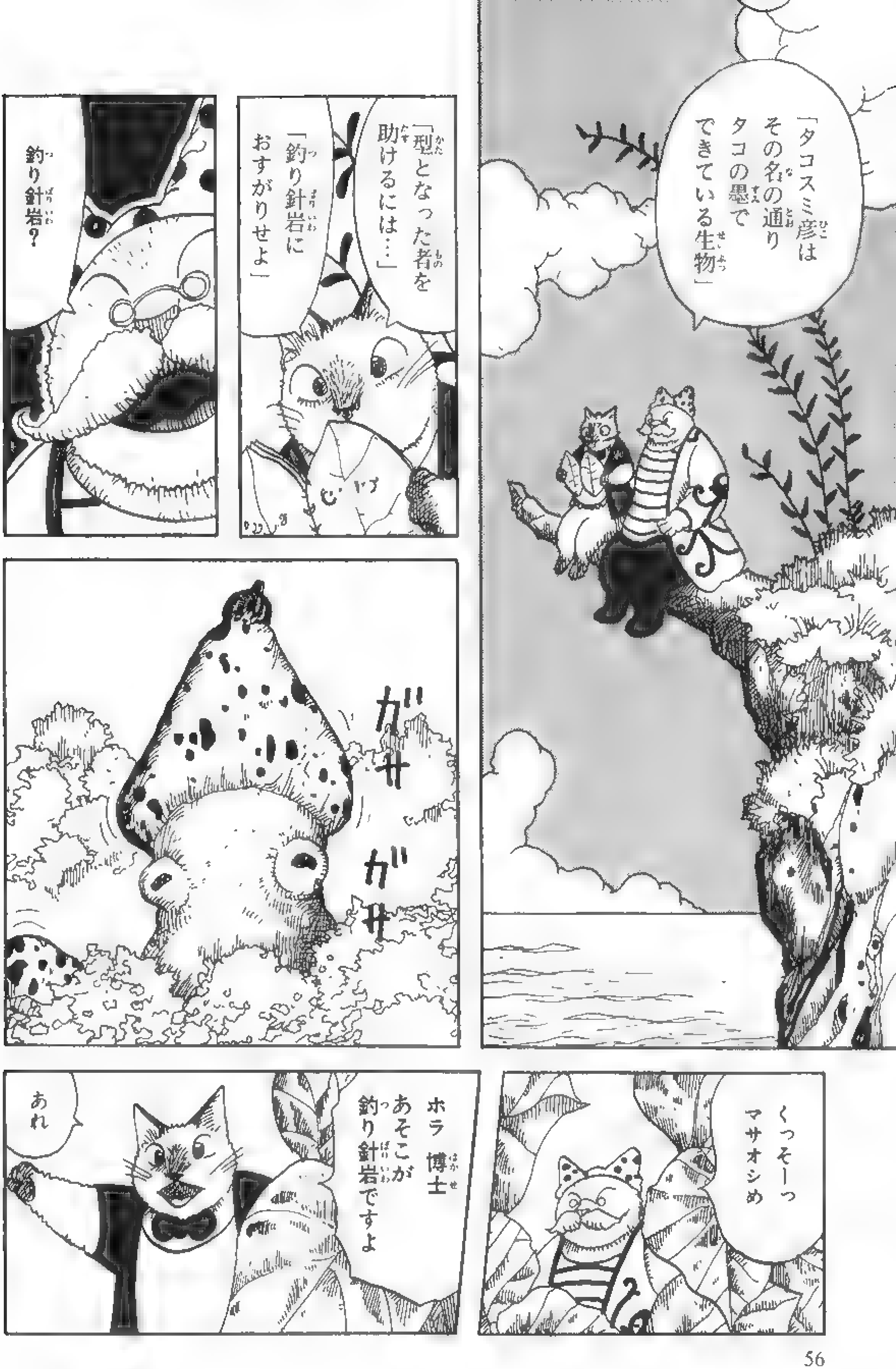
あれは役立たずだよ
ニセモノたちと一緒に食い逃げしてるんだから
甘ーーーい
なにが甘いのよ
ヒデヨシ君がスミどもと食い逃げをしているのは
奴らの弱点を調べておるのじゃよ
フーン それで弱点は見つかったのか
見つからん…食い逃げの数がたりないらしいぞ
いいかげんなことを…
ところでずいぶん体カチカチになってきたようだな
ああ



足の感覚がなくなってきてる
う〜〜っ早く全身がカチカチになんないかなあ
おまえという奴は
ところでパンツはどこに行った？
おまえには無縁な所だよ
ムエン？
図書館
いよ〜〜っパンツ君



体を元にもどす方法判ったか？
調査中です
なに読んでるのだ？
「ホオズキ島古代史」
おおっ……タコスミ彦!?
借ります
あっ コラ
ほほほ
大ダコのマサオシをぶっ飛ばして
タコスミたちをやっつければ紅マグロの大群がいただけるのじゃ
そして「ヨネザアドタコ学会」に発表するのじゃ
ザザー…


「タコスミ彦はその名の通りタコの墨でできている生物」
「型となった者を助けるには…」
「釣り針岩におすがりせよ」
釣り針岩?
ガサ
ガサ
くっそーっ マサオシめ
ホラ 博士 あそこが釣り針岩ですよ
あれ


来たな
なんだ パンツ
素早いのう
いそがないと 体が固まってしまうからな
おんや唐あげ君 アンタ なにしとるのさ
石を感じているのです
石を感じてる?
ええっ このあたりの石からなにかホラ キンキンとした針が頭にささって来る感じします



わけのわからん奴だなあ
ところでどれが釣り針岩なのさ？
このあたりの岩みんなをそう呼んでるようです
ところでパンツ君なにか謎を解く方法見つかりましたか？
すべての岩にいくつかの共通の紋様が入ってる…くらいだなあ
なにをむずかしく考えてるのよ
「型となった者を助けるにはおすがりせよ」だろ
釣り針岩様〜〜っ助けてくれ〜〜っ
びだ
マサオシの奴をぶっ飛ばしてくれい


ほれほれ
ヒデ丸も
パンツも
すがりなさい
なんか違うと
思うんだけどなあ
んっ
相変わらずのバカだねえ
おおっ
ニセ・テマリ君
失敬じゃないか
タコスミの
ぶんざいでーっ
タコスミが
もうすぐ
本物に
なるのよ
ようパンツ
その紋様…
古代の星
だろう
ああ


古代の星!?
ちょっと君たち
新発見とかするんなら
新説はワシが金で買うぞっ
おまえって最低な奴だな
まったくこんな奴になるならスミの方がマシだ
あっ
ザーーッ
ザザ
うっ
わあっパンツ
大変だっ


潮が満ちてきたんだ
うわっ
もう手おくれだよ君は海に還るのさ
あっ
うっ
海水のかたまりだ
素晴らしい
にゃーっ
素晴らしい？


海に胞まれる
旋律が湧く
乗り乗りよーっ
なに考えてんだコイツら
おいっヤメロ
その音癇にさわるっ
やめませーん湧きまくりーっ
そーそーっ弾きまくれーっ


あっ
マサオシが
こっちに
来ますよ
げっ
なんで
来るのよォ
磨あげ丸の
バイオリンの
せいだっ
親方
止めてくれ
止めるのよォ
噴き出す
旋律は
宝石の
流れっ
誰にも
止められない
うう
わはは
マサオシ様
偉大なり


なにが偉大だ
娘さん
マサオシ様に祈りなさい
タコなんかになんで祈るのよっ
あっ
ヒデヨシ そのうしろにある岩を 海の方へ動かしてくれっ
ワシはスミレじゃ ヒデヨシ君ではないぞよ
それに マサオシが来るのよ
いーから早く動かせ
も〜〜っ
ホラ これでいいのかっ


あれ…
そうか
この岩のならびは
鯨釣り座だ
く——っ
よし
そこだっ
パチ
パチ
パチ
バチ
バチ
うがっ
うわっ
来たっ
らっ


くっそーーっ ぶっ飛ばして やるぜーーっ
と言っては みたが
タコに冗談 通じないしなあ
パンツを おとりにして 逃げるしか ねーな
らっ


おおっ
凄い
巨大な光のヒデヨシだっ
ああ



ボコッ
おおっ
マサオシ様ーっ
がんばれーっ
ボ
強いっ


タコがタコなぐりされてるっ
やめろーっヒデヨシの化け物！
すんごい凶暴ですな
ヒデヨシの分身みたいなもんだろうタコには強いんだな
行けーーっもっともっとボコボコにするのよォ
おおっマサオシ様が懇願してるぞ
あっ



金色の墨
おおっ伝説の黄金の墨だ
伝説の黄金の墨？
マサオシ様はいろんな墨を吹かれるが
黄金の墨は最高の墨と言われておるのだ
最高の墨？
うっ



おっ
あっ
おおっ パンツ君の体が もどっていくぞ
あれ
バシャ
バシャ
なんだ コレは!?
オオッ


船だーーっ
あの旗の印は!!
この船…銀しぶき海のどこかに沈んだギンダウル号だ
ギンダウル号って
銀しぶきの海の皇帝と呼ばれた伝説の海賊「異断銀」が乗っていた船ですよ



異断銀？
知らんなぁ
そんな奴
ええっ
メチャクチャ
有名ですよ
そうそう
「海の紳士」
「夕凪の聖者」
男の中の男
あっ
ほほほっ
道がっ
この船売っぱらったら
いくらになるかなあ
ん？
あっ


お待ちしておりました異断銀様

第四話　波動王海談記④

〔プルウ・パッセン〕




異断銀?
オレはヒデヨシ
異断銀じゃないのよ
いえいえ貴方様は選ばれたのでございます
この船の主になられたのであります
主っつーと
この船オレのものなの?
いかにも
私は船の右舷をつかさどるカシガラです


そして
こやつが
左舷係の
スズッペです
あーあ
なんでこんな
猫なんだよォ
異断銀様は
海の紳士と
呼ばれた男だぜ
こいつはタダの
デブ猫じゃ
ねーか
しかも いかにも
頭悪そー
んまーっ
生意気な
骨男
骨男だと
このアホンダラ
オレの名は
スズッペだっ
つーの
おまえに
異断銀様の
二代目が
つとまるわけが
ない
そんなこと
どーでも
いいのよ
それより


異断銀って海賊なんだろ
そんならぶんどった宝をどこかに隠しているべよ
そのありかを教えてくれい
知っていたって教えねえよっ
あの方の宝にふれる者はあの方のような才能と品格が無ければムリなのさ
なにそれ
生意気そうな骨だねえ
あらまっ類は似た者を友として…デブ猫の友は生意気娘にヤニ猫に…
無能青年にヘタクソ楽器ヒゲ
ヘタクソ楽器ヒゲ!? それって私ですかぁ
演奏も聞かずにヘタクソってどういうことだっ


そんなことより宝はどうなっているのよ
宝ちゃーん
異断銀船長の宝が簡単に見つかるわけないだろう
ところで銀歯鍵はどうなっているんだ？
ほほう
ヤ二猫くわしいなどこにあるか当ててみな
入ったとたんに迷路かよお
ムッ凄いなヤ二猫
迷路帯をスルスルぬけていく…
あっ
おおっ
んっ


なんだ
このヒゲ？
この方が
異断銀船長
ですよ
なかなか
シブイん
じゃない
風格が
ありますねえ
これを引けば
鍵が出るんじゃ
ないのか
素晴らしい
どうして
それを
知っているの
ですか？



「艦船伝説誌」という古書を持ってるんだ
でもこれを引いたからといって…鍵が出るとはかぎらないんだよな
なにも起こりませんねえ
船長に選ばれし者のみが手にするものなのさ
おほほ それがオレ様なのよオ
へっ 引っぱってもおまえなんかに鍵が出るもんかっ
そーだよなぁ おまえに船長なんてムリだよ
以下同文
イエーーッ
ぐっ
うっ


ら
おおっ
これが銀歯鍵かい!?
ひええっ
ワーーッ
選ばれちまった
今までの無礼お許しを
貴方は異断銀ヒデヨシ様です〜〜っ
ほほほ許しましょーっ
あれ
ゆれている


うっ
船が勝手に出港してるぞ
わっ ホントだ
どういうことなの？
この船は
船長の意志に反応するように設計されているのであります
ええ？ ヒデヨシの意志
おまえ この船でどこへ行きたいんだ？
海賊船に乗ったら行く場所は決まってっぺよ
それって やっぱり



タダ酒
タダ飯島
なのよーっ
へっ
宝島じゃ
ないんですか
タダ酒島
経由で宝島に
行くのすああ
タダ酒島なんて
あるのか?
あるわよ
あるから
船が動き
出したのよ
ドン
パン
パンパン
んっ
変な花火だな


あれは通信花火だ
通信花火？
なにを知らせているんでしょう？
このギンダウル号が復活したことかもしれないね
翌日
ザザーーッ
あ〜〜っ
まだ？
まだなのォ
タダ酒タダ飯島は？
いらいら
そんな島あるわけないだろう
いいかげんあきらめろよ船の針路が決まらずグルグル回ってるぞ
くっそーっオレはあきらめない男なのよォ
こんな時には気分転換に


ホレ
ホレ
ドッ
ザパウ
うははは
気ん持ちいーっ
あれっ
船長
左舷前方35度方向より船ですが…
おっ
あの旗印



ほう…あれが伝説の船ギンダウル号か
さすがに異断銀船長の乗っていた船ですな…
すげえ妙な船
モズマ船長
射程距離に入りましたぜ威嚇発射を始めますか
いやまもなくオレの物になる船だ
近づいて右舷放列態勢をとれ
あの船の船長は大ダコ マサオシ公にかみついたらしいぞ
相当に狂った野郎だ気合入れて全員持ち場へつけっ
プルウ・パッセン
あの旗ホラ



これですよ これ
ん
「『青ダコ人魚号』モズマ男爵ひきいる海賊船 バンドゲル国戦艦を沈めたため その首に 2万金貨の賞金がついている」
そうか モズマ男爵か 銀しぶき海賊の賞金首の中でも一番じゃないか
メチャクチャ強いぞ
なにが青ダコ人魚号だよ
うまそうな名前だなっ
ホントに変な名だねえ
船首の守護神が
タコ顔の人魚ですよ


ああっ ブルウ・パッセン号が どんどん近づいて 来ますよ
よーし 一発くらわせて やろうぜ
ダメです 黄色旗が 揚がっています
黄色旗？
「会話スル」という 合図ですよ
手旗で 会話するのです
オイラ 「海賊見習い 通信」で 勉強しましたっ
うーむむーっ ブルウ・パッセン号 見事な舵さばき
風上の域を 押さえて 右舷からの 放列か…ハアー やっぱデブ猫船長じゃ すぐ沈むなあ
ちょっと スズッペおまえ 生ぐさい鯨油で 酔ってるのか


酔ってたって仕事はデキますえーっ
チャーンと弾丸も装填したべよなあ
スズッペなんでそこにいるんだっ面舵の係だろう
どういうことだアイツらの船オレたちの右舷放列に横腹を出して平気で近づいて来るぞ
よほど度胸がいいか…それとも策略か
オレが……二代目異断銀ヒデヨシ船長だ
おれが



なんだ…ヒデヨシ船長って
ニヤニヤしたバカそうな猫じゃねえか
信号師送れ
私がモズマだ
伝説の船に出会えてうれしく思う
……
……
えっ
ザーーッ
…ハイ…
パタ
パタ
「モズマ…おまえの髭そり落としてヤルぞ」
「それから宝の隠し場所言え」



「言ったら みいんな 海へ飛び込め」
「そしたら 許してやる」…だとォ
フホホホ…
ふざけるんじゃ ねえぞ コラア
船長 砲撃 命令を
ちょっと ヒデヨシ なにやってんだ
そうよ 挑発は やめてよ
大砲の砲首が みんな こっちに 向いてるんだぞ
おお無鉄砲な ヒデヨシ様ーっ かっこいーっ
異断銀様も 度胸のある男 だったーっ
さあ 答えろっ タコ野郎


タコ野郎だとオ…
3番砲まで
発射
うわあ
撃ってきたっ
なんだっ
あれは?
これは……
磁場の壁が
出来てるようじゃ
ボッ
ボゥン
おおっ



凄ーーい
途中で爆発したわよーーっ
くっそおっ
ダメだっ
砲撃が効かないぞ
素晴らしい船だ
なんとしても手に入れるぞ
どうです
すべてはこの器械の力なのです
よーし
今度はこっちの番だぜえ
くらえ
ダメですよ
磁場壁が張ってあるんだから


ズッ
あっ
つきぬけたっ
なんだ
あの玉
念根固弾
じゃないか
ネンネコ弾?
うわわっ
酔っぱらって
玉込めして
マチガッタ…
うわっ
パウ
あっ
くっ被弾したっ
うっ
なんだっ
これはっ
ブク
ブク



エータ
エータ
イーエ
イーエ
ブク
ブク
うわあ
ブク
ああ
ニュルン
フエフエ
パーっと
生きましょ
酒飲んでえ
海賊ド[redacted]ボウ
楽しいなあ
海のものは
オレのものォ
念根固弾は
砲手の気持ちが
弾丸に入り
噴き出すのですが
……
こんなに大きいのは
見たことない…
ハーッ
盗んだ船で
また盗みーーっ
朝から
[redacted]まで[redacted]飲んでえ
なんだ
これはっ


パ――ッと
生きましょ
酒飲んでぇ
いい加減な
唄をっ
海賊ドロボウ
楽しぃな
ペタッ
うっ
海のものは
オレのものォ
船長
撤退だっ
左回転
うっ
ペタ
なんだっ
こっちにも
来るぞ
こうして
2隻の
海賊船の
船乗りは
唄い踊り
続けました



第五話　波動王海談記⑤
〔言霊ノ石〕




ザザー！
ザザーッ
あ〜〜っ ひどい目にあった…
身体中痛いよ…
3日間も変な唄 唄いながら踊ってたんだからねえ
そういえばモズマ男爵のブルウ・パッセン号見えませんねえ
どこへ行ったんでしょう
偏西風に流されて西に行ったようだな
オレたちの船は
どのへんにいるんだろう


見当もつかないなあ
夜になって星座が見えれば位置がわかりますよ
ヒデ丸はほんとに頼りになるねえ
…で頼りにならないうちの船長はなにしてるんだ?
らんららん
フー!!
湯かげんはいかがですかな
気持ちいーぞォ
でももーっとでっかい湯舟が好きよっ
よーし温泉だ
温泉のある所へ行こう



あれ
んっ
船の針路が北の方へ変わりましたよ
この船は船長の意志で動くらしいから
ヒデヨシがなにか決めたんだな
宝島の場所が判ったんじゃないでしょうか
ヒデヨシくーん
この船宝島へ行くんですかーーっ
情けないのう
異断銀様が温泉めざすとはよォ
温泉なのよォ
でっかいお風呂なのよォ
え〜〜っ温泉〜〜っ


ところで諸君
飯だ
飯の用意をしよーぜい
飯の用意って この船急に 出航したから
食料なんて 積んでいないぞ
ご安心のほどを テンプラ様
食料倉庫に タップリありまする
食料倉庫!?
キーー
オッ
んっ
これって 高いんじゃ ないか?
ああ



海中で眠っていた年代ものの葡萄酒
これは一本3銀貨はしますぞ
これを持ってどこかの島に行けば
食料と交換できるな
なに しみったれた事を言ってんのさ
オレがみーんな飲んじゃうのよ
酒はたっぷりあるが
食料はどこにあるんだいカシガラ
パンツ様こちらにタップリと


あっ
缶詰だ
でも…何百年も昔のやつですよ
ああ この缶詰なんかふくらんでるぞ
中で発酵してんじゃないか
うっ
これクサヤだ
クサヤっ 好き好き 食う食うっ
やめろっ 開けるんじゃないよっ


カシガラちゃん
缶切りはどこ？
缶切りは食堂です
ええい めんどくさい
本気の
キーッ
ツメッ
うわっ
う
つーん
ぐふっ


はぐ
はぐ
激臭
ふ〜〜〜っ
たまんないよ——っ
けっ
あいつの鼻はどうなっているんだ
鼻の穴開いてないんじゃないですか
ハーッ たっぷりねかせたクサヤは
しびれる味だなあ
こら うがいしろ 歯みがけっ
オレは生まれてから一度も歯みがいたことないのです


なんでだーーっ
なんでそんな奴が
異断銀様の
二代目に
なれるんだあ
しかし弱りましたねえ
クサヤの缶詰なんか
食えないし……
魚釣るしか
ありませんねえ
ホホホッ
空腹で釣り
すると
釣れませんぞ
ささ船底へ
らっ
イエーーーッ
これっ
生け簀じゃないか!?
船に
吸い込み口が
あって
魚が自然に
捕れるのである
イイ
ぞお


凄い船ですねえ
ああ いったい誰が設計したんだろう
それは オレたちを作った潮眼博士が作ったのです
潮眼博士!?
ザ〜ッ
オオーッ オレたちは
波頭をマクラにいっ
海鳴りの城をめざすう
くっそう あのデブ猫の野郎
3日間もデタラメな唄を唄わせやがってっ


船長っ 早いとこ
ヒデョシとかいう野郎を
見つけ出し
毛皮をはいで
甲板に
敷きましょうぜ
そうだっ
奴ならさぞや
巨大な敷物に
なるだろう
しかし
実に不思議な
船ですなあ
オレたちの
砲弾は届かないし
変な弾で 3日も
踊らされるし…
さすが
異断銀船長の
乗っていた船…
なんとしても
手に入れるぞ
しかし どうして
あんなバカそうな奴が
船長なんか
してるんでしょうか
大ダコ海王
マサオシ公を
脅迫して
脅しとったのだ
奴は無礼猫っ
断固 ぶちのめすっ


先回りして待ちぶせはいかがですか
ねえ
どうして船長の部屋だけこんなに広いの!?
オレは偉いのよーーっ
広いはずだよ奥に…
オオッ書庫だ
凄い
古代の幻の本たちが!!
宝物よりももっと貴重なものだ



うるさいなあ
眠れないわよ
おまえが
眠れないわけ
ないだろう
スーコ
スーコ
あれ
もう寝てる
赤ん坊
並みだね
ぐーっ
これで
静かに
読書が
できる
それじゃ
パンツ
お休み
ああ
お休み
ザザッ
……


んっ
あっ
ん
なんだコレは!?
うわっ浮かんでる
ぐーっ


翌日
オレが浮かんでいた!?
眠ってて浮かぶわけねーべよ
ねーべよじゃないの 浮いたの!!
オイラも見ましたよ
ホラその証拠にヒデヨシ君の腕
ら
なんだ こりゃ
オレは発光ナマズかあ
パチ パチ パチ
カン カン
西南西に船ですぜ



ブルウ・パッセン号ですっ
なにーっ 青ダコ人魚号だとォ
撃沈してやるぜい
ドドーン
ホレホレ
船長 砲弾のムダですぜっ ぜんぜん届きませんよォ
くー 待てないのよーっ
そんならダーッと行きますか？
ダーーッでもブワーーッでも行くわよーーっ
ザザ…


ブーン
待て 海賊どもめ
野郎 こっちへ来ますぜ
撃ち落としますか?
照準だけ合わせておけ
そこの海賊ども
オレがギンダウル号のヒデヨシ船長だぞ
モズマ船長はどこだ?
オレがモズマだ
おまえがマサオシ公をかじった不届き者か
マサオシ…公?


そうだ
海で生きる者にとって 巨大な鯨や大ダコは畏怖の念をおこす…
ましてマサオシ公は銀しぶきの主 そのお姿に出会うたび頭が下がるものだっ
ちーがーうーっ ヨダレがたれ下がるのよーっ
そんなことよりモズマ
おまえたちが盗んだ宝をオレに渡して 今すぐ海に飛び込めい
なに言ってんだ おまえ!?
こらあ デブ猫 降りて来い その毛皮ひきさいてやる
おんやあ どうしても贈り物が
欲しいのかな
それでは贈りましょーっ



うっ
くさいっ
どうです
クサヤ爆弾の
威力は？
くらえっ
ド
キャッ
ビ
おっ
なんだ
これは？
パキ
パキ


青き海の同志諸君
君たちは夢を持っているか
あれ この声?
うわっ この声
おおっ この声は!!
今もまだ持っているかい
異断銀様だっ
なんて心に響く声なんだ…
ホラ


これを胸に当てて
こすりたまえ
くっそーっ どうなってんだ 口が勝手なこと言ってるぞ
うっ
うぐぐ
オレの夢はこんな海賊になることじゃなかったんだっ
あれ
なんだかもめてるな
海賊なんかヤメタ オレはヨネザアド一番の床屋になるんだ
オレもやめた
大陸にもどろう
オレの夢は船長だっ
勝手なこと言うな
船長 オレを船長にさせてくれーっ
針路を南に
こらっ なに言ってんだっ 船長命令を無視するのか
船の灯りが遠くに見えるな


しっかしよォ 口が勝手に 動き出すって 変な感じだぞォ
異断銀の 声か…
ええ あれは まぎれもなく なつかしいお声
聞きたかったなや
そして船員は これを胸に 当てて…
こすった のか
サコ サコ
!
あの時 異断銀の 声はこう 言ったんですが 最後は ヒデヨシ君の 声でした
満ちた波が やがて 引いていく ように
あらゆるものが しなびて いくだろう
だからこそ 胸に抱えた夢はよぉ 時々は


研がなくてはならないのよ！

第六話　波動王海談記⑥
〔種〕




フーッ んまかった
あいつ また…
迷ってんじゃ ないの
あんな簡単なのに どうして迷うんだろ
覚える力 ないんですね
くっそーっ
なんて 食堂の前に 迷路があるんだあ



敵が攻めて来たときのためだべよ
だいたいなんでこんな単純な迷路に毎日迷うんだ
おっスズッペ助けてくれ
オレを出口に連れてってくれ――っ
ほほほっ
方向音痴の船長は飯が食えねーのさ
コラーーッ 待て このヤロ
くっそお こうなったら
わっ


あいつ
なにやってんだ
この船
沈める気か
どんな迷路でもォ
通りぬけるう
フーーッ
んめーっ
あら
んっ
みごとに
破壊しましたなぁ
穴だぞ


なんだ この穴
知らないス
ということは…
異断銀船長が作らせた隠し階段か
それじゃあ この先にあるのは!?
ひょっとして凄い……!!
食いものだな
凄い食いものってなんだろな〜〜っ
おまえって食うことしか考えられんのか
ヒデヨシ君 宝物ですよ
異断銀船長が隠した宝物
そうか


宝ちゃん宝ちゃんドコなのよっ
フーッ
なんにもないなあ
あれ
なんだこりゃあ？
なんかの種かなあ
見たことないぞ
パンツ知ってる？
いや……見当もつかないよ


ガリッ
石みたいに硬いぞ
いらねえ こんなもん
じゃあ オレがもらうぞ
調べてみよう
ザザー…
温泉のある島か
異[redacted]銀[redacted]の船が [redacted]泉めざすなんて
のどかですなあ
のどかはいいんだけど


ブルウ・パッセン号の乗組員たちは
オレたちが温泉めざしているなんて思ってないだろうなあ
ザー
デブ猫の船北に向かってまっしぐらだぜ
こりゃあひょっとしてお宝かあ
そうですよっ絶対に宝島に向かっていると思いますよ
異断銀船長の宝って……凄いんだろうなあ
なに のどかなこと言ってんだ北方になにがあるか知らないのかっ


トンボの言う通りだ
どう思う流眼
北進は狂気のさたじゃよ
だが あの猫は平気で行くだろう
ここで引くわけには行かないな
ザザーッ
おっ
ぜぜっ



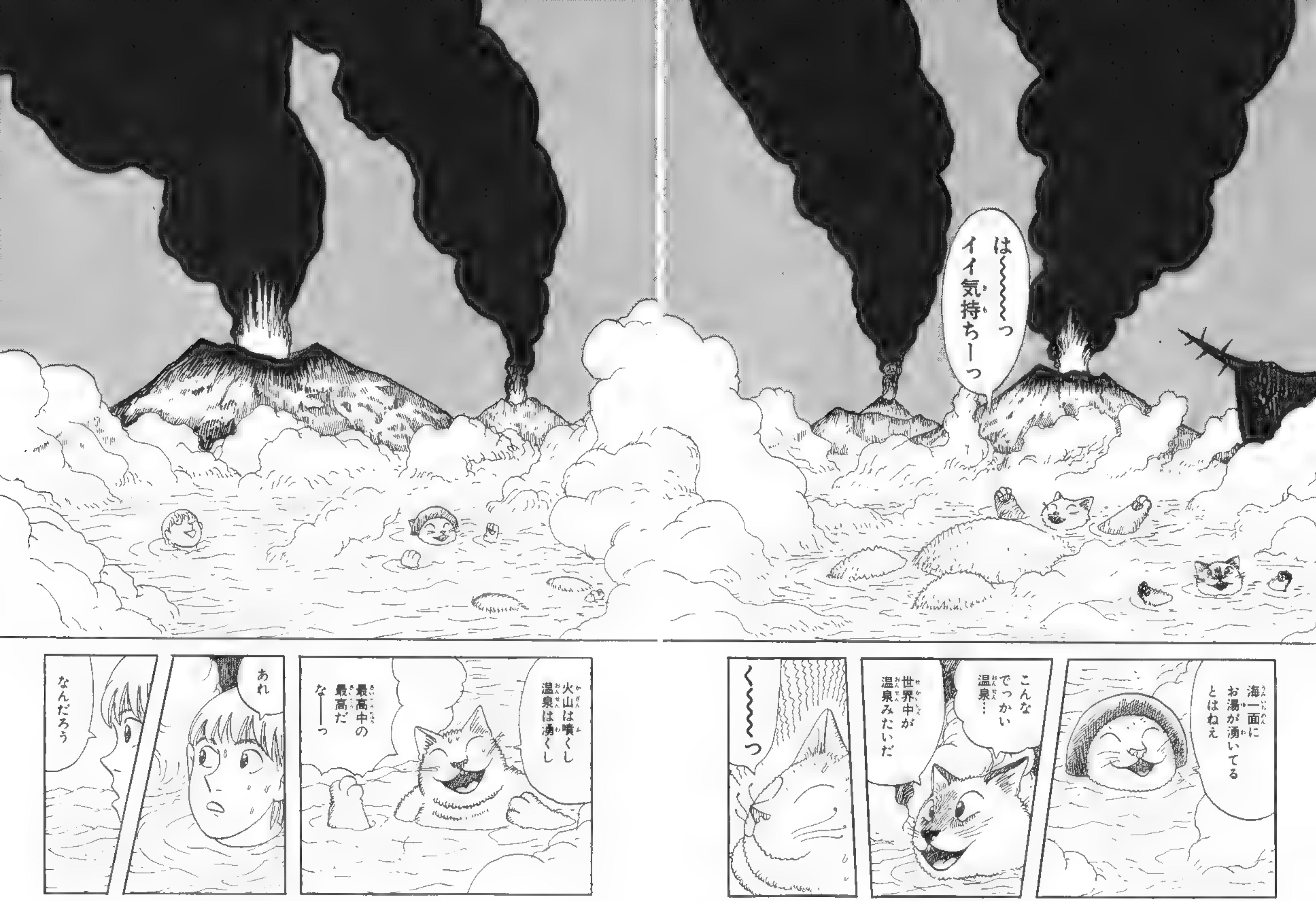
絶景じゃあ
ドドドドッ
ドドッ


ドズズ
ほーーら
火山様が
歓迎してるぞ
わっ
ド
火山弾が
降ってくるぞ
雨のように
進めーーっ
進むのじゃーっ


キッキッキッ
ドゴッ
恐怖こそ旋律の父
ハイハイ弾きます弾きますとも―っ
ホホホ――ッ
親方
ダメです早くもどってっ
ズウッ
ひええ船が燃えるぅ


キャーッ 火事よっ
火事なのよーっ
スズッペ なにやってんだっ
壁用熱器のボタン切ったままだったあ
ブン
ゴッ
ゴッ
おっ凄い
にゃっ
シュー
偉いぞ この船


ヒュー
ボーン
船長
火山弾がひどくて
船がもちません
直進は無謀じゃ
迂回なされ
くっ
そのようだな
数時間後
らんらら
らん
あれ急に
船が止まったぞ
目的地に
着いたから
じゃないのか
目的地って
…ここ？
にゃあ


は〜〜〜っ
イイ気持ちーっ
海一面にお湯が湧いてるとはねえ
こんなでっかい温泉…
世界中が温泉みたいだ
く〜〜〜っ
火山は噴くし温泉は湧くし
最高中の最高だな——っ
あれ
なんだろう


イエーーッ
温泉森ーっ
こんな所に温泉森が発達してるなんて…
お湯がいいからですよ
素晴らしい成分です
それにブッコロ貝も楽しみですからな
ブッコロ貝？
んまそうだなっ



味は そんなでも ないけど 中身がね
中身？
ザザー…
ブッコロ貝 ブッコロ貝 どこにあるー
黄色の やつだってさ
あるか？
ら
これか
ザブ…
おっ見つけ


では さっそく やってみるか
なにかを念じれば いいんだな
ねんねん ねんねん
……
……
!
それでは これは… 誰のでしょう


酒飲みたい
くぴくぴ飲みたい
フーム 貝の中に念が残るのか
おろっ
こりゃあ パンツのだな
しかし この貝
中はどうなってんだ
んっ



これ
どっかで見た
ような…
あっ
これは!!
ああ
船の隠し階段の下で
見つけたものの小型だ
このでっかいのにも
念が入ってるのかな
たぶん


念って誰のですか
異断銀船長じゃないかな
よーーし どんなもの残してんだあ
おっ
あれ これ?


波動王海図……?

第七話　波動王海談記⑦

〔波動王海図〕




はどうおう?
ああ
「波動王海図」と書いてあるぞ
波動王ってどういう意味なんだろう
ううむ…
さっぱりわかりませんなあ
でも異断銀船長が残した想いということは…
宝物じゃないでしょうか


その可能性はあるな
宝だ宝っ
宝の地図だあ
パンツーッ場所はどこなのよォ
調べてみよう
翌日
なんだよォ
わかんないだとォ
パンツともあろう者が
地図も読めんのかあ
うるさいなあ
ジャマだからあっちへ行ってろよ


ヒデヨシ船長
大変でーす
ででで
ん
ホントだ
モズマの船だ
オレたちを追って来たんだな
違うわよ
温泉の海に入りに来たんだべ
この船をもらいに来たのさ
らっ



モズマ
この船はオレのもの
異断銀二代目のものなのよーっ
まず鍵をいただこう
銀歯鍵をな
あの鍵よォ首にかけて寝てたら
無くなってたんだよ
なんだと
ふざけたことを言うな
おとなしく渡さないとその毛皮ひっぱがすぞ
フッ
よーし
モズマ
オレとサシで勝負しようぜ
ええっ


オレが負けたら この船をやろう
おまえが負けたら おまえたちはオレの子分なのよ~っ
いいだろう 剣か銃か
剣にしようぜ
ちょっと待って 着替えて くるからサ
…なんだ アイツ…
待たせたな
海賊野郎 どっからでも かかって来ーい
ふざけんな デブ猫
船長 こんな奴 オレが相手 しますよ
あ~あ あんなに 挑発して
毛皮 はがされますな


ホーレホーレ
かかって来なさい
うりゃ
くっ
せあ
ホッ
あっ
身軽っ



とおっ
うっ
こいつ 肥満児のくせに
やけにすばしっこいぞ
調子良いのよっ
最近 身体が軽いのよ〜〜っ
変だな
モッタラしたヒデヨシじゃないみたいだぞ
ホーラホラホラ
カン
カカ
カッ
くぬぬ


ザクッと串刺し
痛いわよ〜〜〜っ
あっ 桃色の鯨が
あんな所に
えっ鯨
スキあり
あっ
ヒデヨシ君
にゃっ
くうっ
なんだ
コレは!?
凄い
光の壁だ


このやろォ
モズマ
きったない
マネしてえ
ゆるさ
ないわよォ
フッ
あっ
キャ
異断銀船長は
守られてるのです
守られてる?
モズマ君
オレの家来に
なりなさーい
そうカ


そこだっ
ん?
急に身体が重くなった
らっ
おおっ
くっすお こうなっては
苦しい時の…


わっ
眠り花粉
おっ
らっ
どうやらオレが異断銀三世だな
あっ桃色の鯨
なにーーっ


二度も　かかるか
ドリ
ッ
諸君
ギンダウル号は
オレたちのものだっ
オーッ
乗組員は
これだけか
あと
パンツが
いるよ


パンツ？
馬鹿っぽい名前だな
そー地図も読めない奴なのよ〜っ
波動王海図つうの
なにっ
波動王海図だとォ
！
波動王…海図…？
オオ…
これか


ウーム
それで パンツとやら この図の意味は 解けたのか？
多少は…
ほう 説明して もらおうか
この海図には ベルキ海洋族の 波文字が 使われています


ベルキの波文字？
この部分です
ほう…これが波文字
お主 これが読めるのか
ええ ある程度
「ザウ・ザズウ・ンンザ・シャーチ・ザドオング…」
フーム… まさに波音だな
それで意味は？
解読中ですが……完全ではありません
ただ この海図が示している位置は だいたい判ります
ホントかっ
ザザー…ッ


ザ
ザーーッ
ザーーッ
も〜〜〜
なんでオレだけ足かせついてんのよォ
そりゃあおまえが反抗的だからさ
そーそーやーい奴隷猫ーっ
スズッペこのやろう
ホーラ草むしりちゃんとやんないと晩飯ぬきだぜ
くっすおう



草なんか
いくら生えても
イイべよなあ
モズマの野郎
草なんか気にして
こまかい奴だなあ
ザーーッ
腹へったあ
飯くれえ
死ぬうう
ズゴッ
ズゴッ
ガガ
ガフ
ガフ
あっ
コラ
奴隷猫
ナベから
直接
食うなっ
ドンブリなんかに
入れてるヒマ
ないのよーっ
死にそう
なのよォ
ガフ
ガフ
ドドーン



あの馬鹿
あんまり
働かせないほうが
イイな
フ〜〜〜ッ
食った
食った
しかし まあ
残飯が
出なくて
楽だのう
でも
食いつぶされ
ますよ
ガヤ
ガヤ
ホラ
葡萄酒は
ひとり3杯まで
だぞ
おーっ
ネズミ札
かあ
ガヤ
わはは
ようし
ガヤ
んめ〜〜〜っ


どーれ 海賊ども オレが一丁 もんで やるかあ
威勢のいい 馬鹿めがっ 体中の毛 むしり取って やるぜ
タップリ 勝って 君たちの酒 まき上げますーっ
なあヒデヨシ
そこに なんて書いて あるか 読んで やろうか
へっ?
「ツキまくりで おめでとう」 かな?
「イカサマ禁止 見つかった場合 しばり首」だよ


しばり首
今まで二人吊るされてるぞ
イカサマだけはよしときな
オウ
堂々と勝つわよ
4枚揃えだからな
んっ
フムフッ
ドクロちゃんかあ……
2枚交換
来いっ
来るのよォ〜ッ


コレだあ
揃え
揃っちゃうのよーっ
うるさい野郎だな
くーーっ
1枚交換
2枚交換なのよォ
来〜〜いっ
来い来い
来いっ
チューー
やったあ
あーーあ


ホホホ
ねえねえ もっと ドーンと 賭けない？
一発ドカーンとさ
チャリッ
明日一日中 オレのかわりに 奴隷をやる そして銀貨5枚
銀貨5枚っ
ようし… いいだろう
おう
ぐっ
なんだよォ もう バラバラ
ホ
3枚交換
どーーっ
奴隷解放じゃ
来るのォ 来るわよォ ホーレホレ 自由ーがっ


チューーーーッ
じゃーーん
…ウソだろう

第八話　波動王海談記⑧

〔耳の穴〕




上がりーっ
チューーッ
イカサマくさいなあ
バレたらしばり首ですよォ
イカサマだっ
そうだっ たて続けに 3枚交換から 一発でそろう なんてっ
イカサマだろう
ツキよ
ついてんのよ～～っ
ねっアンタたちさ もおっとドンと 勝負しない？
翌日
ザーーッ



海賊屋さんは〜〜〜っ
ザッ
ザッ
ザッ
楽しいなーっ
ヒデヨシ
おまえの仕事の草むしりはどうした?
モズマ君
オレは奴隷解放されたのよ〜〜〜っ
草むしりならオレの家来どもがやってるぜーーっ
おまえの家来?
ガッチュルにパラト
なにやってんだ?


ネズミ札でボロ負けしちまって
1カ月間ヒデヨシの言いなりに…
情けない奴らだ
でも船長っ
ヒデヨシの奴絶対イカサマやってますぜっ
イカサマだと
負けたからってイチャモンつけちゃダメよっ
おいヒデヨシ判ってるだろうな
イカサマはしばり首だぞ
判ってるわよダンナさん
ところでパンツの奴朝飯も食わずに…部屋から出てこないな


波動王海図の波文字を解析しているからです
ザウ・ザズウ・シンザ波文字って音楽的でイイですねえ
パンツには解けないんじゃないの〜〜っ最近のパンツ調子悪いわよォ
ペルキの波文字などというものを読める者はパンツ君しかいない
だが不思議なのは
彼ほどの賢者のそばに
おまえのような愚猫がいることだ
ぐっ
彼は大切な客猫だっくれぐれもジャマするな
へーい
あ〜あ


モズマの親父はーーっ
ウルサイなーーっ
……心のせまあい海賊だーーっ
パンツの部屋
(ヒデヨシ立ち入り禁止)
ここにも心のせまい奴が
波文字はパンツにゃ解けませんーっ
だからーっ
ジャン
スミレ博士に助けてもらええっ
泣いてわめいてすがるのよォ
コラ貴様
うるさいなあ
解いたぞ


なにーっ 解いた!?
えっ
パンツ君 解けたのか!?
ええ 一応…
でかした パンツ君 さすが ワシの弟子
なにやってんだ ヒデヨシ
ワシは ヒデヨシ君の 心の友でな アタゴオルの 万能研究家 スミレ博士 ですじゃ
付けヒゲ した位で 他猫に なったつもりか
単純な奴だ
お主 ヒゲの有る無しは 重要じゃぞ


モズマ君のそのヒゲも取ってしまえば他人になるのじゃ
ホラ
ニボシじゃないか
ポリ
ポリ
さすが船長ヒデヨシを黙らせた
あッ
流眼パンツ君が文字を解いたらしいぞ
そのようですな聞かせていただこう



波文字の意味は
「銀龍の金目の奥は耳の穴」
「引く者待つや
ねじれ大くぎ」
なんのことなのか
…さっぱり判らん
うーむ…
こんな簡単な文が
判らんのか
「ギンリューの
キンメの奥の
耳の穴
聞く耳持つには
耳カスそうじ」
ようはな
「耳カスをためると
なんも聞こえないよ」
ということじゃ
ほら ニボシ
もっと食ってろ


ポリ
ショリ
「銀龍の金目の奥は耳の穴」…この銀龍と金目なんですが
現在 我々の船は背骨海流に乗って南下しています
ペルキ海洋族はこの背骨海流を「銀色ノ龍」と呼び
落陽海流を「金色目玉」と呼んでいたのです
!
すると…
ええ
2つの海流のぶつかるあたりを指しているのではと
なるほど…



しかし海流の合流場所なんてとほうもなく広大だぞ
この図にその位置が示してあります
示してあるって君はこの海図が判るのか!?
海底の型なのか?
オレも最初そう思いましたが
これを見て下さい
!
にゃあ?
あっ泥亀座っ
海図に星座か
この印は古代の時間印で
午後3時を示しています


ですから その時刻に 泥亀座が 南中する場所
偉いぞパンツ さすがワシの 弟子じゃ
しかし 午後3時に 星座なんか 見えるかなあ
星座盤が あれば…
ワシには 見えるよ
ほんとかあ ほっかむり爺い
海流の合流地点の奥に 耳の穴があり…… 「引く者待つや ねじれ大くぎ」
この 「ねじれ大くぎ」なんですが
ペルキ海洋族は 船が沈まないように お守りとして 船体に大くぎを 隠したらしいのですが
それがこの型 なのです


ねじれの大くぎ
チュ〜〜〜ッ
馬鹿ツキじゃの〜〜〜っ
てめえっ イカサマだっ
イカサマはしばり首だぞォ
酒はタップリ 銭はたまるし
海賊船は最高じゃのう
アイツ 吊るされるまでやめないな…
度胸があるというか 考えがないというか…
5日後
なーっ


このあたりなんだろう
ああココだよ
あたりにゃなんにもないんだから海の底があやしいべっ
よーし家来どもここに飛び込め
トンボおまえ行け
海賊のくせにドーンと行かん奴らだ
潜れるわけねーだろう海の底まで行ったら一生家来になってやるよっ
よーしオレが潜ってやる
じょうだんじゃないよ
海の底までどの位深いか判ってんのか
3000尾っぽはあるんだぞっ水圧で体がつぶれちまうぜ

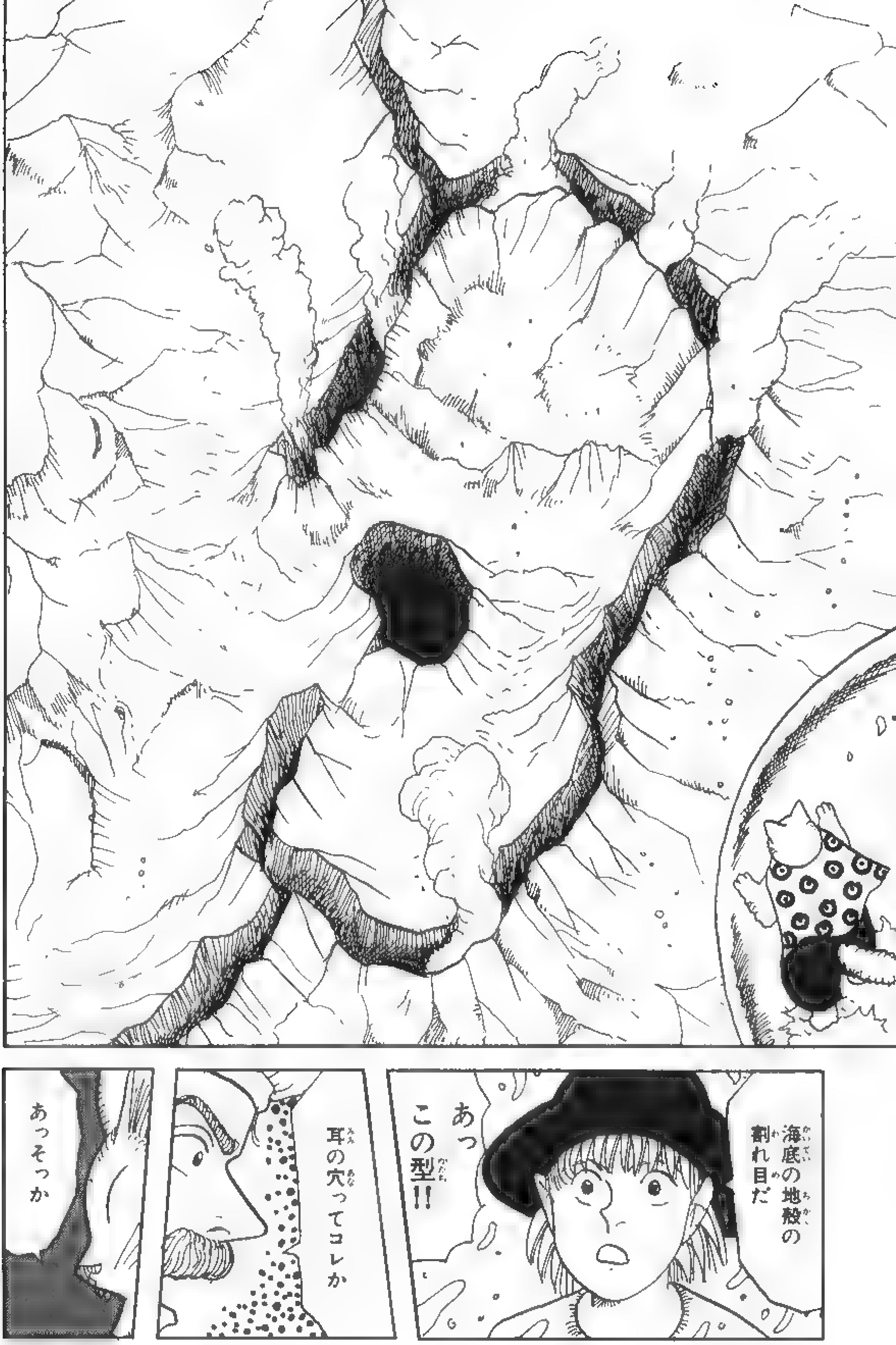

こーして異断銀の宝は オレのものになるのだ
3000尾っぽも管はないぞ
すぐ上がってくるよ
宝ちゃーん
ドブン
くーっ
むちゃくちゃ深いなあ
ぐえ
なんだ体中重い
痛でで
ぐわう


助けて
ぐぶ
ふへ〜〜〜っ
死ぬかと思った…
体中 ギュウギュウ重くなって ガラスが割れたんだ 水圧のせいだよ
おのれ 水圧
ああ くたびれた
昼寝しよう
あれっ ヒデヨシ おまえの部屋 そっちじゃない だろう
ホホホッ こっちからも行けるのよ
ズズ
ああ

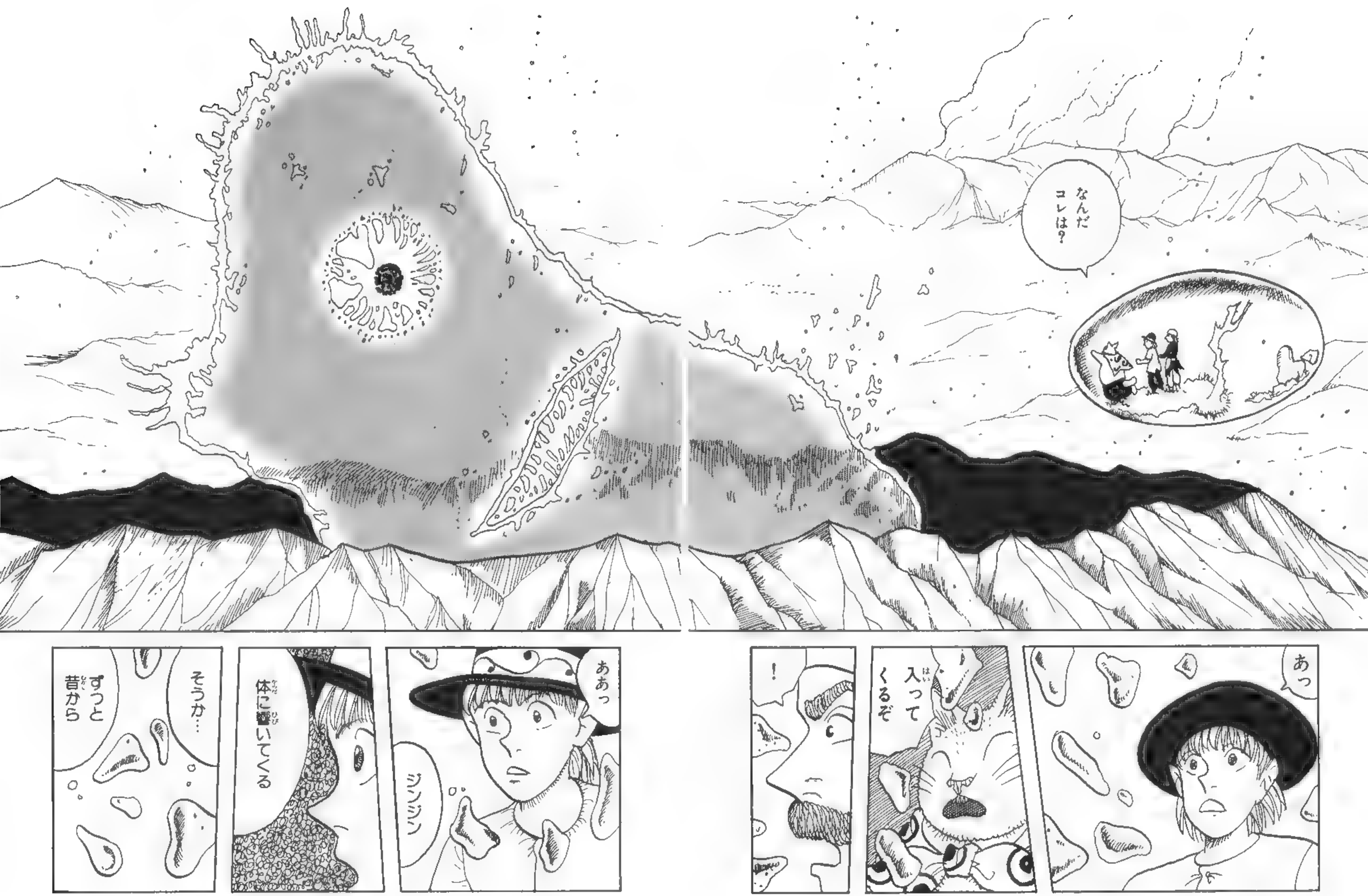

なんだっ
この穴
おまえ掘ったのか!?
そうよっ
食料庫を
探して
もくもくとな
部屋とじこもって
いると思ったら
こんなことを
してたのか
フエフエ
この壁の向こうが
モズマの部屋だぜ
あれっ
ねじれ大くぎ
どこかで
見たと思って
いたが
こんな所に
あったのかあ
う
ズズズッ
なんだっ
らあっ


オッ
凄え
なんだ これはっ
あっ モズマ船長
船の中にあった ねじれ大くぎを ヒデヨシが 引いたんです
これは潜水艇か
ドンドン沈んで 行くわよーっ
海の底で 待っているのはーっ
らっ


マサオシだ
くっそーっ
オレがかじったのを
憎んでるんだなあ
ああ
おおっ
にゃあああっ


海底の地殻の割れ目だ
あっ この型!!
耳の穴ってコレか
あっそっか


海の底の大穴…
なんという深い暗黒…
ドクッ
ドクッ
うっ
ドクッ
ドクッ
ありゃ
ドクッドクッドクッ
心臓がうるさいぞォ
なにかに反応してるんだっ
あっ
うっ


なんだコレは?
あっ
入ってくるぞ
!
ああっ
ジンジン
体に響いてくる
そうか…
ずっと昔から



アタゴオルは猫の森⑦ おわり

ますむら・ひろし先生の最新情報はホームページ

「ごろなお通信」

をご覧ください。
イベントや新刊の情報、ファンと先生の
交流の場となる掲示板など、楽しみいっぱいです。

http://homepage1.nifty.com/goronao/



アタゴオル余波7

ますむら・ひろし

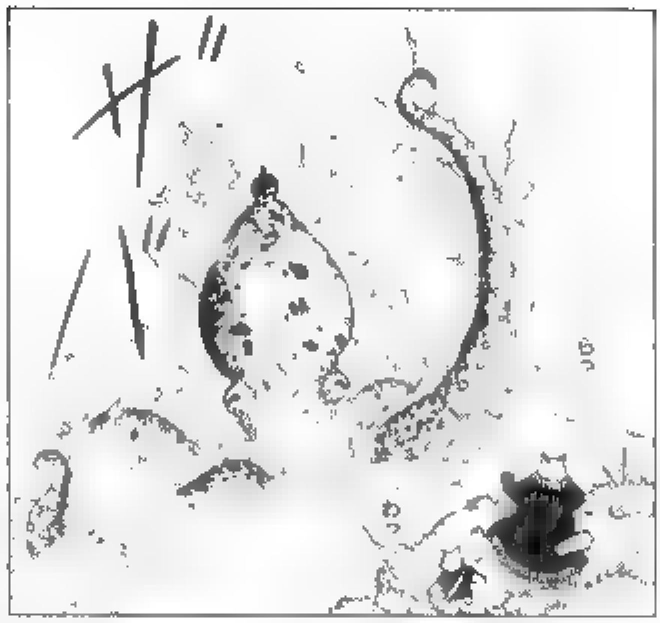
ワールドカップの隙間をぬって、四年に一度ヨーロッパの国々が争う欧州選手権がポルトガルで始まった。二大会前の九六年英国で開催されたとき、僕はフットボール・ツアーを三つハシゴして二十日くらい現地で見ていた。それから二年後のフランスでのワールドカップに日本が初出場して、狂気のような高いチケットを大量の日本人が買いまくったあと、ベルギー・オランダでの二千年欧州選手権ツアーの値段を見て呆れた。英国大会の倍近く高騰しているのだ。フランスでの高いチケット買いは、「日本人は馬鹿高い値段を出す」という前例を作り、それがこうした形で現れ、そのあまりの高さに行く気は失せたが、今始まろうとしているポルトガル大会も、やはりその数字に笑いが出るほどだ。だが行かないのはこうした理由ばかりではなく、



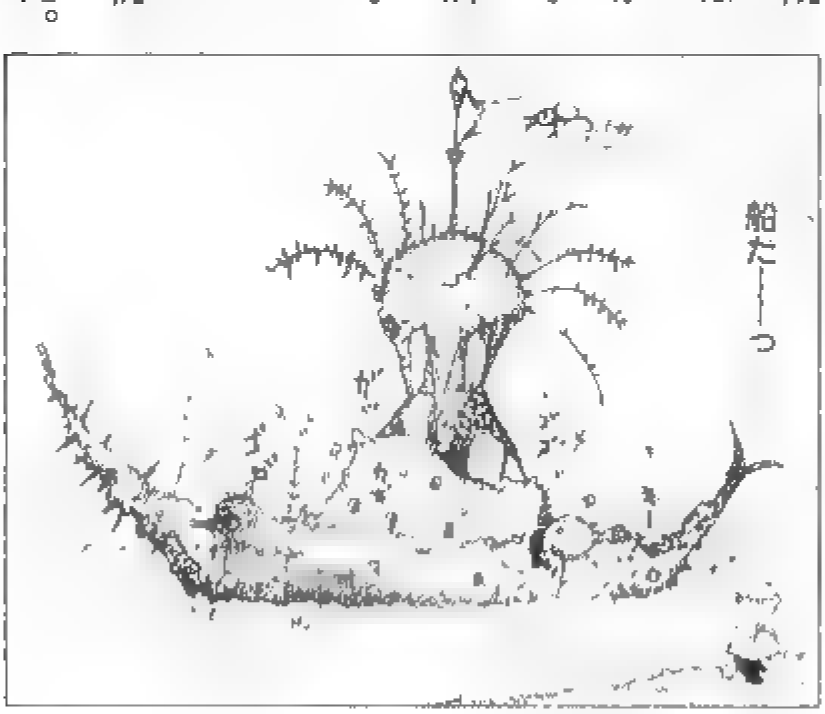
僕のなかで欧州フットボールへの熱が冷え、南米フットボールへの熱が深まっていった為でもある。
　フットボール観戦をするようになって、最初はどこの試合でも面白い。なんでも食べる人みたいに、欧州クラブ選手権の決勝や、イタリア・英国・スペイン・ドイツとアチコチに行って試合を見てきた。するとだんだん好きなチームがはっきりしてきて、その結果、セリエは興味の盛りあがらないリーグとなり、毎年楽しみにして生観戦したがったチャンピオンズリーグも、レアル・マドリード対マンチェスター・ユナイテッドの決勝なんか、どうでもいいがレアル負けろくらいにしか思わなくなった。それは贔屓のクラブが出来たせいだ。ガウディ見たさに十度ほど訪ねた街バルセロナ。欧州の故郷のようになじむこの街のクラブFCバルセロナに、僕は殉教する。
　何かを好きになるということは、どうでもイイ域から出てしまうことだ。何でも見てれば嬉しい域から、これのために集中するという区域に行ってしまう。こうしたことは人間の意識の流れとして当然のことなのだが、一種の不幸でもある。俗にいうところの「知らないうちが花」の沼へどんどんはまって行くのだ。何見ても感動の時期は過ぎ、思い入れが積み重なり、フットボール観戦の旅は、欧州から南米へと激しく傾斜していった。フットボールを現地で見ているうちに、会場の奥からその国を包んでいる無意識がニュッと現れてくるのだ。勝っているときはイイが、負けそうになったり劣勢になると、簡単にあきらめるブラジルの民。パッとしない試合をやって0対0のまま後半が進むと、楽しそうに試合開始に振っていた小さな国旗が、滝のように会場に投げ込まれる。まだ試合が終わっていないのに、選手を嘲笑して、相手チームのパスに「オーレ・オーレ」と声援しだす。こんなことは日本では考えられない風景だ。まったくあきらめの早い人たち。またイングランドでの試合というと、なにかとフーリガンの話題になるが、現地でずいぶん試合を見たが荒れた時代はすぎていて、フーリガン目撃は



一度もなかった。それよりも驚いたのは観客のマナーの良さだった。モノは投げ込まない、芝生に簡単に降りられるのに入らない。そしてなにより凄かったのは、リバプールで見た対バルサ（バルセロナ）戦。なにしろ日本の観客と違い、ゴール裏が試合も見ないで応援しているなんてことはなく、スタジアム全体が試合を見ている。自分たちのチームがボールを奪い返しカウンター気味に走り出す瞬間、ワーっと湧く拍手と気持ちの高鳴り。ほんとうに試合見ているなあと思う。まったく素晴らしい。そして僕がもうひとつ感動したのは、相手のチームのリバウドがうまいプレイをした瞬間、なんと会場から拍手が起こったのだ。相手のいい動きに拍手してみせる国民、英国の観客は実に素晴らしい。そしてこうした規律の裏側で、闇のエネルギーは蒸留されてフーリガンを産むのだろう。それは音楽シーンでも起こったわけで、カチカチの英国階級性から、労働者のエネルギーとしてビートルズは現れ、その熱はやがてパンク・ロックの域まで行ってしまったのだ。欧州ではイタリアやスペインの観客のマナーが一番悪いようで、とにかくモノが投げ込まれるし、イタリアのゴール裏で発火する発煙筒の煙で、試合開始からしばらくは選手が見えなくなるのだから実に困ったものだ。



こうしてあちこちうろついたが、印象深かった試合のひとつはドイツ・ミュンヘンでのバイエルン・ミュンヘン対バルサ戦。四月だというのに小雪が舞い、北海道のような北国風情のなか、ドイツ観客はイタリア観客とは違い、ドッシリと静かなものだった。そしてバルサが一点取った瞬間、僕は嬉しくて両手を上げたのだが、そのときガツッと僕の座っている椅子は後ろの親父に蹴られたのだった。



ここはアウェーなのである。バルサのマフラーなんか恐ろしくて巻けないのである。そして会場はざわめきだし、一点を追うバイエルンのサポーターたちはシュプレヒコールを激しくやりだした。眠っていたものが起き出したのだ。そしてそのシュプレヒコールを聞いていているうち、何かににていると思いだした。そうだ、あの風景そっくりだった。それはナチの党大会のヒットラーの演説に反応する国民の声そのものだった。ゲルマン魂と呼ばれるものがスタジアムの観客席の底から湧きあがってきたのだ。なんという強い声。あきらめの早いブラジルの声の反対側から湧き出した強烈なる意志。そして同点ゴールが起こった瞬間のスタジアムのどよめきと歓喜。夜空に響くドイツ人たちの声は、彼らの闘争心の深さをみせていた。



だか、こうして旅をしているうち感じるようになったことは、欧州はすでに飽和を過ぎてなにかが終わった世界のようなのだ。栄光や繁栄の残像が点滅し平穏なる下り坂を歩いているような。そして僕は南米に行くようになり、いくつかの国でフットボール観戦するなかで感じるのは、密林の気配なのだ。パラグアイの観客席から「パーラーグイ」コールが起こるとき、同時に吹く口笛の音は、密林の鳥たちのようだし、アマゾンやどこまでも続く密林の上を飛び続けていると、スタジアムは緑の火山の火口のように思える。人は環境の産物であり、南米の自然が育てた人間性が、独特のフットボールスタイルを生み出していったのだが、そのなかでも我が心を捕まえたのは、ブラジルという国のフットボール。

その身勝手さ。そしてトリッキーさ。今売りだし中のバルサ在住のロナウジーニョが見せるドリブルでの独特のフェイント。彼がコパアメリカ九九で見せた相手の身体の上を軽くボレーで抜いてのシュートは、映画のように美しかった。八二年スペイン大会をテレビで見て以来、ブラジルが見せる自由とトリッキーなプレイ。これこそが僕の好き

な世界観なのだ。だが不思議なことに、そうした「らしさ」は年々ブラジル代表の試合のなかでは見られなくなっている。選手のほとんどが欧州で働き、その結果、個人技ではなく組織的なスタイルへ流れ、なによりもドリブル突破というフットボールならではの魅力的場面が、組織的ですばやい囲い込みによって難しくなっていることからも、本来このスポーツが持つ美しさが、勝つためにドンドンつまらない形になっていくようだ。自在さや自由さというものが、勝利というものへの到達へ結びつかなくなることが進歩だとすれば、厳しい世界が見ていて面白いのかと問われているようでもある。



自由はそれゆえ囲みこまれ、だからこそ解放への壁を越えなければならない。ブラジルは勝利しなければならないのでなく、ブラジルらしさを見せつけなければならない。ということで、フットボール談議をえんえんとやってきたわけは、第七巻のあとがきといっても、ここで書かれている物語は、現在進行形であり、回想する状態ではないのだ。だが、ただひとつ、「言霊の石」の時、大変なことが起こった。

下書きを終えて、ペン入れ、すなわちペンで描きだしてしばらくして気づいたのだ。十二ページが二枚ある。こうしたミスは、ほとんどやったことがないし、そうした場合下書きの途中で気づいていた。ところが最後まで下書きは終わっている。こうなると一ページ分を数ページの描きなおしで詰めなくてはならない。これは大変な作業だ。真っ暗な気分になりつつそのあたりを読んでいると、なんと、十二ページの二枚目を破棄するだけで、セリフの変更を一ヵ所すれば、なんとかつながるのだ。こんなことは奇蹟に近い。まったくついている。ではもともとの形から書いてみよう。

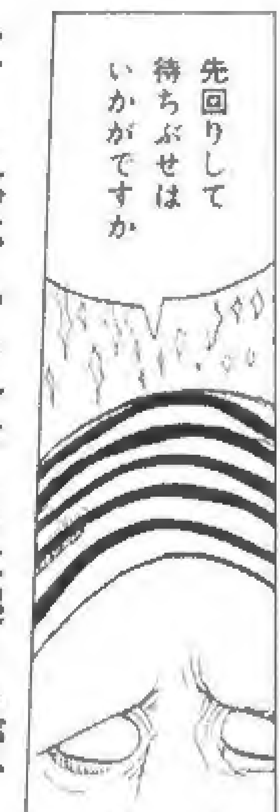


テキスト「言霊の石」十二ページを開いて最後のモズマ船長のセリフを見てみよう。「奴は無礼猫、断固ぶちのめす」とあり、十三ページの一コマ目に流眼の「先回りして、待ちぶせは、いかがですか」が来る。だがこの間に一ページ分の七コマがあった。それは十二ページの最後の言葉「奴は無礼猫、断固ぶちのめす」に続いて次のように始まる。

「そして、このモズマ男爵が異断銀二世と、なるのだ」「流眼、ギンダウル号の位置は…」



「東南東…約八十万尾っぽ」「北北西に向かっています」「ということは」「先回りして待ちぶせ出来ます」「ようし、その線で行こう」「ん、流眼、どうした、浮かない顔だな」「どうも、あの船の奥から」と、ここまでが一ページであり、次の十三ページの最初のコマの流眼は「おかしな気配が漂っています」となっていたのだ。この流眼の言葉が、のちのちに異断銀の幻の登場への伏線となっていたのだったが、変更されて削除となったのだ。それにしても、長いこと描いてくれば、いろんなミスは起こるが、ページの多い足りないは、胸がギュウウウと鳴るくらい、恐ろしいものだ。



さてこうして今、ヒデヨシたちは銀しぶき海に漂う海賊船に乗っているが、これが長い海の旅になっていったのは、もとはといえば作者の僕が、昨年の夏、八丈島に行き島の人たちと数日すごしたことから始まっている。普段の島の旅よりも、もっと住んでいる人たちと関わったので、島のなかにあるオカシナ気配を感じたのだ。島の無意識というやつだ。そうした気配が僕のなかにしみこんで、おかげでアタゴオルは銀しぶき海を漂い始めたわけだが、タコのマサオシはクネクネと動き、僕のなかで切れ切れの物語は流れ出し、それらの流れをこう呼ぶことにしよう。「波動王海談記」。現在流転中。さて、どこへたどり着くのか、それを描くために、夢のボールを蹴り続けるのです。バモス・バルサ・イ・ヒロシ。ビスカ・バルサ・イ・アタゴオル。

（初出）コミックフラッパー 2003年12月号～2004年7月号

MFコミックス
アタゴオルは猫の森………………7

2004年 7月31日 初版第1刷発行

著者……………ますむら・ひろし

発行人……………松岡博治

発行所……………株式会社メディアファクトリー
〒104-0061 東京都中央区銀座 8-4-17
TEL 0570-002-001 03-5469-4760(編集)

印刷・製本…………大日本印刷株式会社

ISBN4-8401-0959-1 C9979